

会員の広場



言葉、言葉、言葉

須山 茂樹（東京）

「春の小川」、日本人ならどなたでもご存知の文部省（小学校）唱歌である。「春の小川は、さらさらいくよ……咲けよ咲けよと ささやきながら。」私にはこの歌詞にかなりの違和感がある。川は「いく」のであろうか。「ささやきながら」には「川がおしゃべりする

の」と子供たちの声が聞こえそうである。高野辰之氏の原作詞は「さら／＼流る」、「咲けよ咲けよとささやく如く」と正確である。これは昭和17年「初等科音楽」に収録の際、小学三年生用には口語体でなくてはならないと修正されたもので、言葉に鈍感と思われる。

国会中継を聞いていると、一体国語教育はどうなっているのかと思われるやり取りが行きかう。が、それはさておき、マスメディアでは気になる言葉がいろいろ使われている。

昨今、新型コロナウイルスよく使われているのが「新しい日常」、「新しい生活様式」である。しかし今のような毎日が定着したのであれば、たまったものではない。あくまでも新型コロナウイルス蔓延下での我慢の、一時しのぎの生活で、

多少の変化はあってもいずれ元の「日常」に戻る筈である。

テレビ、ラジオの放送。最近あまり聞かれなくなつたが、芸能人などのお二人が記者会見し、「このたび私たちは結婚して、何月何日入籍しました。」と語る。戸籍法では一部の例外を除き、夫婦は婚姻により新戸籍を編纂するとしている。「入籍」ではない。「〇〇線は信号機の故障のため現在運転を見合わせています。」と放送する。強風や大雨によるのは「見合わせ」で良いが、設備の故障や脱線などの事故では「見合わせ」ではなく運転不能、不通である。「小学〇年生の女兒が夜になつても帰宅せず、事件に巻き込まれたのではな

き込まれたのではなく災厄の当事者である。ドヴォルザークの「母が教えてくれた歌」という美しい歌曲がある。以前は「我が母の教え給ひし歌」という優雅な題名であったと記憶する。今の乱暴な題名は、せめて「母が教えて下さった歌」位にならないものか。

言語は民族所産の文化である、と言うより民族そのもの、民族の魂である。フランスの公共放送は、美しいフランス語を使い、遺すことを何より大切にしているそうである。NHKの昔の報道の録音を聞くと、驚くほど丁寧で美しいのに、今はヨコ文字があふれている。「何々が〇月〇日、リ、ユ、アル、オー、プ、ン、しました。」などというニュースを聞くたびに嘆いている。